

近年のエイズ発生動向に基づく MSM 層(地方、若年層、滞日外国人)に関する研究

研究代表者：市川誠一(人間環境大学大学院看護学研究科 特任教授)

研究協力者：塩野徳史(名古屋市立大学看護学部)、新山 賢(HaaT えひめ)

本間隆之(山梨県立大学看護学部)、岩橋恒太 (NPO 法人 akta)

金子典代(名古屋市立大学看護学部)、高久道子(人間環境大学大学院看護学
研究科)、岩木エリーザ(NGO・CRIATIVOS PROJECTO SAUDE)

研究要旨

近年の MSM におけるエイズ発生動向から以下の 3 点の研究を追加した。

1) 中四国地方における MSM の HIV 検査状況に関する調査

コミュニティセンターの無い地方の MSM への予防啓発、自治体事業連携、MSM 向け HIV 検査について(岡山県クリニック検査等)、取り組んだ。CBO・HaaT えひめは自治体と連携して MSM の検査促進を図る広報資材を商業施設に配布した。岡山県では 3 クリニックと協力し MSM に保健所以外の検査機会提供を進めた。(詳細は別添報告書を参照)

2) 若年層 MSM における性行動および HIV 関連情報活用に関する調査

若年層 MSM において HIV 感染が増加していることから、若年層 MSM に向けた対策を探るために、HIV 関連情報、検査、予防、商業施設の利用等を把握する。本年度は、過去に実施した MSM 対象のアンケート調査から、都市部の 24 歳以下の MSM における商業施設、検査行動、予防行動について総括し、次年度に予定する調査手法を検討した。

3) 外国国籍 MSM の動向と HIV 関連情報活用に関する調査

外国国籍 MSM の HIV 感染者報告が増加していることから、外国国籍 MSM の性行動、受検行動、HIV 関連情報の認知等を把握する。英語圏、南米、タイ、中国、韓国等の外国国籍 MSM を対象とする多言語によるインターネット調査システムを構築した。

A. 研究目的

近年のエイズ発生動向の特徴は、地方の MSM での HIV/AIDS 報告例の増加、若年層 MSM および外国国籍 MSM の報告例(国内感染例が過半数)の増加が示されている。わが国の感染者・患者の大半を占める MSM において再び増加することなく減少に転じさせるためには、これらの MSM 層への予防啓発の促進と共に、MSM 全体への早期 HIV 検査と治療の推進が重要である。

MSM における HIV 感染は、30 歳代以上の年

齢層では都市部にて横ばいまたは減少傾向にあるが 20 歳代層に感染が移行していることを先行研究にて指摘した。近年のエイズ発生動向はこの指摘を反映したものとなっている。また、中国・四国および九州地方では HIV/AIDS 報告数の増加が続き地方自治体では MSM への HIV 感染対策が課題となっている。さらに滞日外国人では国内感染例が過半数を占めて増加している。これらの MSM 層の特性、性行動および受検行動等の情報を収集し、その対策を検討することは今後の MSM における

HIV 感染対策において重要と考える。本年度、以下の 3 研究を追加した。

1) 中国・四国地方の MSM に関する HIV 検査状況に関する調査

本研究では、ゲイコミュニティセンターの無い地方の MSM に向けたゲイ CBO と自治体連携による HIV 感染対策の取り組みを調査し、地方での事例を示すことを目的とする。既に 2014 年から取り組んできた岡山県の事例を報告する。なお、本研究に関する詳細は別添報告書に記載した。

2) 若年層 MSM における性行動および HIV 関連情報活用に関する調査

本研究では、ソーシャルネットワークの発展により多様な出会いが可能となった若年層 MSM について、特に都市部の MSM について、その出会いのきっかけ、性行動と予防に関する意識、HIV 感染や性感染症 (STI) への意識などを調査し、若年層を対象とした啓発活動の方向性を探ることを目的とする。

3) 都市部における滞日外国人 MSM の動向および HIV 関連情報活用に関する調査

本研究では、多国籍化している訪日外国人、特に MSM について、多言語で日本国内での性経験、検査受検経験、HIV 関連情報の活用状況等を把握し、滞日外国人を対象とする啓発の方向性を探ることを目的とする。

B. 研究方法

1. 若年層 MSM における性行動および HIV 関連情報活用に関する調査

研究協力者: 本間隆之 (山梨県立大学看護学部)、岩橋恒太 (NPO 法人・akta)

2015 年度は、首都圏地域の MSM を対象にこれまでに実施してきた性行動、検査行動調査から、若年層 (24 歳以下) MSM についての特徴を整理した。また、これに基づいて、2016 年度に予定している若年層 MSM を対象とした質的・量的調査の方法を検討した。

2. 外国国籍 MSM の動向と HIV 関連情報活用に関する調査

研究協力者: 金子典代 (名古屋市立大学看護学部)、高久道子 (人間環境大学)、岩木エリーザ (NGO・クリアチボス)

エイズ発生動向調査における外国国籍感染者・患者の動向を分析し、外国国籍 MSM の動向を明らかにした。また、国内で実施されている滞日外国人対象の HIV 関連の調査研究から、母国語によるアンケートを可能とするための多言語によるインターネット質問紙調査のシステム構築を準備した。なお、予算軽減を図るため、前身の研究班で用いた外国語対応インターネット調査を改変することとした。

加えて、国籍、日本国内での性経験、検査受検経験、HIV 関連情報の活用状況等に関する質問項目を検討し、滞日外国人への支援活動を行っている CBO と共に内容や調査方法等について検討した。

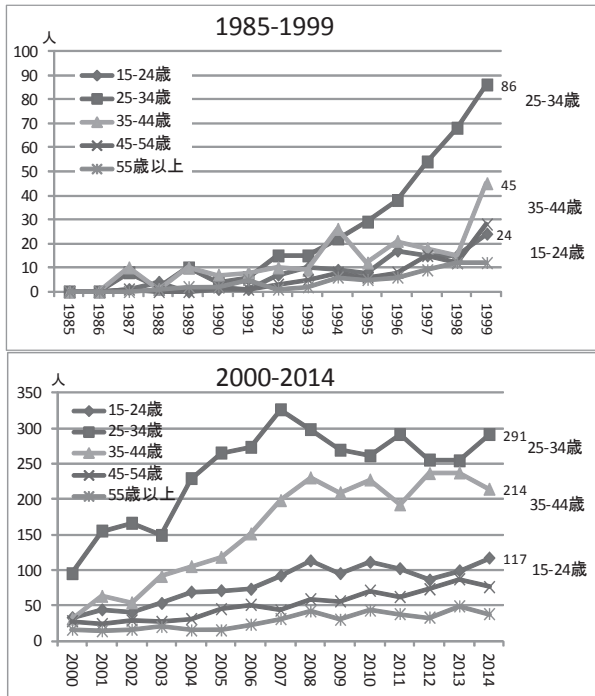
C. 研究結果

1. 若年層 MSM における性行動および HIV 関連情報活用に関する調査

1) 近年のエイズ発生動向の特徴

MSM における HIV 感染は、30 歳代以上の年齢層では横ばいまたは減少傾向にあるが 20 歳代層で感染が広がっていることを先行研究にて指摘した。エイズ発生動向調査はこのことを反映した結果となっている。日本国籍 MSM の HIV 感染者報告数の年次推移を年齢層別にみると、1985 年～1999 年までに 25-34 歳層で著しい増加となり、この増加は 2007 年まで続き、2008 年からやや減少の傾向となっている (図 1)。35-44 歳層においても 1999 年～2008 年まで増加が見られたが、その後は横ばいとなっている。一方、24 歳以下の層では、1999 年の 24 件まで微増、その後も報告数は増え 2014 年は 117 件とおおよそ 5 倍の数字となっている。この動向は報告時年齢によるもので、このことは若年層 MSM での HIV 感染

図1 日本国籍MSMにおけるHIV感染者報告数の年次推移-年齢層別-(厚生労働省 平成26年エイズ発生動向年報)



が 2000 年当時に比して多いことを示唆している。わが国の感染者・患者の大半を占める MSM において、報告数を減少に転じさせるためにはこれら若年層 MSM への予防啓発は重要といえる。

2) 若年層 MSM の商業施設利用、検査行動、予防行動

2012 年、2013 年に実施した MSM 対象のインターネットによるアンケート調査(GCQ)から、首都圏の若年層 MSM のゲイ向け商業施設利用状況、アナルセックス経験率とコンドーム常用率、HIV 検査受検行動についての分析結果を評価した(参考: MSM の HIV 感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究(研究代表者市川誠一)、平成 24 年度総括・分担研究報告書 p 41-77、平成 25 年度総括・分担研究報告書 p 57-96)。首都圏の 24 歳以下の MSM は、2012 年調査ではゲイバー利用率が 60%、ゲイナイト 26.2%、ゲイショップ 26.9%、有料ハッテン場 14.8%で、携帯出会い系サイトの利用率 35.5%、PC 出会い系サイト 25.2%であった(図 2)。同年の 25-29 歳を

見るとそれぞれの利用率が 10%前後高くなっており、年齢と共に利用率が高くなることが示されている。このことは 2013 年調査でも示されている。また 2013 年調査では、商業施設や出会い系サイトの利用状況は、24 歳以下、25-29 歳共に 2012 年より高い状況であった。

生涯のアナルセックス経験率は、2012 年調査では、24 歳以下が 65.9%、25-29 歳が 83.4%、2013 年調査では 24 歳以下が 84.9%、25-29 歳が 92.5%で、どちらも年齢で経験率は高くなっている。過去 6 カ月のアナルセックス経験率は、2012 年調査では 24 歳以下が 83.8%、25-29 歳が 75.5%、2013 年調査では各々が 84.4%、84.8%であった(図 3)。特定相手とのアナルセックスでのコンドーム常用率は 40%前後で、2013 年調査の 24 歳以下は 31.3%と低い状況であった。また不特定相手の場合は特定相手との場合よりも常用率が高いが 50%以下であった。コンドーム常用率に年齢による差異は見られていない。

図2 首都圏の若年層MSMにおける商業施設利用

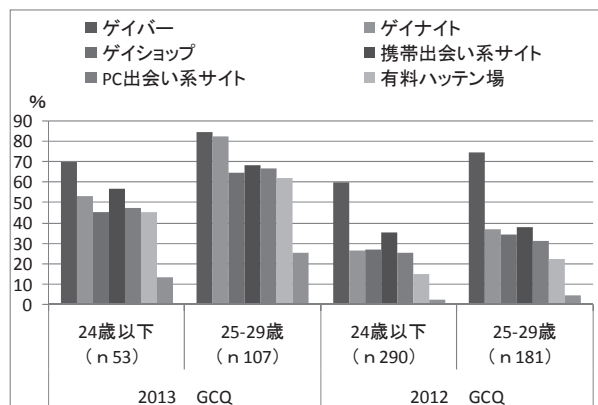
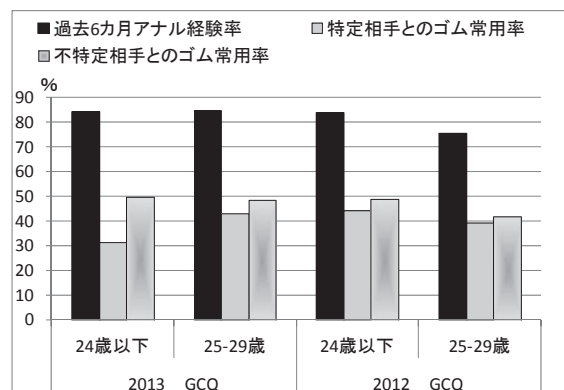


図3 首都圏の若年層MSMのアナルセックスと予防行動

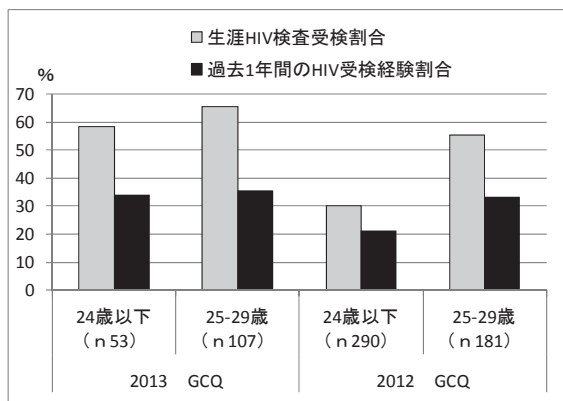


HIV 抗体検査受検行動では、生涯受検割合が、24 歳以下の MSM30%（2012 年調査）と 58.5%（2013 年調査）と調査年で異なっていた。しかし 25-29 歳では 55.2%と 65.4%とほぼ同率であった(図 4)。過去 1 年間の HIV 抗体検査受検割合は 2012 年調査では 24 歳以下が 21.0%で 25-29 歳 33.1%より低いが、2013 年調査では 34.0%と 35.5%で差はなかった。

3) 若年層 MSM を対象としたニーズ調査

都市部の若い MSM を対象に、出会いのきっかけ、性行動と予防に関する意識、HIV 感染や性感染症(STI)への意識などについて、質的、量的調査を実施し、若年層を対象とした啓発活動の方向性を探る(次年度計画)。

図4 首都圏の若年層MSMのHIV検査受検行動



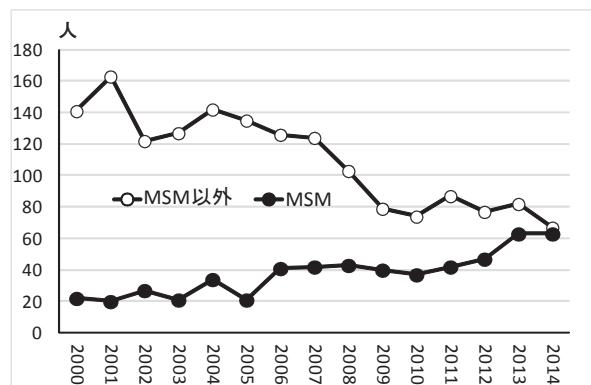
2. 外国国籍 MSM の動向と HIV 関連情報活用に関する調査

1) 近年の外国国籍 HIV/AIDS 報告の特徴

外国国籍の HIV 感染者、AIDS 患者の報告数の動向をみると、総数 (HIV/AIDS 報告数) は 2001 年の 183 件をピークに減少し、2010 年は 111 件となった。しかしその後は 124 件、145 件、130 件と再び増加の兆しである。HIV/AIDS 報告数を MSM および MSM 以外に分類してみると、MSM 以外では 2001 年以降減少が続いているが、MSM では徐々に増加しており、2014 年の報告数は、MSM63 件、MSM 以外 67 件とほぼ同数となった (図 5)。MSM の HIV/AIDS 報告数

のうち、増加しているのは HIV 感染者であり、国内感染例が過半数を占め、また報告地域は東京、大阪、愛知などの都市部が中心となっている。

図5 外国国籍HIV感染者・AIDS患者報告数
- MSMとMSM以外の年次推移 -
(厚生労働省平成26年エイズ発生動向年報)



近年の外国国籍 HIV 陽性者の国籍について、1996-2002 年と 2008-2013 年を比較した研究が報告されている (外国人におけるエイズ予防指針の実効性を高めるための方策に関する研究 (研究代表者仲尾唯治)、平成 26 年度総括・分担研究報告書 p 21-36)。これによると、従来、外国人の HIV 症例の大半を占めていたタイ、ブラジル、ミャンマー、ペルー、ウガンダといった地域の出身者から、中国、フィリピン、インドネシア地域の出身者に変ってきている。すなわち、東アジア出身者の割合が増加し、その特徴は平均年齢が若く、比較的日本語能力が高く、保健所などの検査施設を利用しており、独身の男性であることから、比較的若年で日本語能力の高い MSM が多くを占めていると推定されていた。

2) 外国国籍 MSM を対象としたインターネット調査

日本語による外国国籍を対象とした質問紙調査は、回答が日本語能力に左右され、偏りが伴う調査結果となることが想定される。また、近年の訪日者の特徴として、多国籍化があげられており、英語圏に加え多言語による

質問紙が必要となっている。そのため、外国国籍者を対象とした調査はあまり行われていない現状にある。

そこで、本研究では、先行研究で行った英語による質問紙調査を軸に、多言語によるインターネット調査システムを開発した。言語は、日本語、英語によるシステムをベースに、ポルトガル語、スペイン語、タイ語、韓国語、中国語、タガログ語など8か国の調査が実施できるシステムに改変することを試行した。

また、調査項目は、試行的に、1) 基本属性、日本での生活（滞在期間や日本語能力など）12問、2) エイズや性感染症に関連したこと（知識、対話経験、検査行動など）12問、3) 性行動および予防行動、性感染症既往など12問（異性間、同性間別の質問）とした。

D. 考察

1. 若年層 MSM における性行動および HIV 関連情報活用に関する調査

24歳以下のMSMはアナルセックス経験率が25-29歳MSMに比してやや低いが、過去6カ月の性経験を有するものでは必ずしも予防行動が高いとは言えなかった。24歳以下の若年層のHIV感染者報告数は、2000年当時に比して5倍の数となっており、予防行動が低いことから、この層への啓発は喫緊のことと考える。本研究班は、2000年ごろからゲイバイセクシュアル男性が構成するCBOと共に、商業施設を利用するMSM、特にクラブイベント等を利用する若いMSMを対象にした啓発資料のアウトリーチを展開した。近年、携帯系の出会い系サイトなどが登場し、MSM同士のコンタクトは多様化している。特に若いMSMに対しては、新たなアウトリーチの方法を開発することが必要となってきた。本研究では、次年度に都市部の若いMSMを対象に、出会いのきっかけ、性行動と予防に関する意識、HIV感染や性感染症(STI)への意識などについて、質的、量的調査を実施し、若年層を対

象とした啓発活動の方向性を探る。

2. 外国国籍MSMの動向とHIV関連情報活用に関する調査

外国国籍MSMにおけるHIV感染者の報告が増加していること、中でも国内感染が主であることは、これらのMSMに対するHIV感染予防啓発が必要であることを示している。外国国籍訪日者は多国籍化しており、国や地域によって、セクシュアリティやHIV/AIDSに対する偏見・差別は異なっている。外国国籍MSMについてはこの点も考慮してかかる必要がある。

本研究班は、2010年の先行研究で、外国国籍ゲイ・レズビアン・バイセクシュアルを対象にインターネット調査を英語で実施した（参考：男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究（研究代表者市川誠一）、平成22年度総括・分担研究報告書p214-234）。外国国籍MSM（143名）は、その80%が就労目的で訪日しており、日本国籍MSMに比してHIV関連情報が得られておらず、HIV関連の知識は低い傾向にあった。

日本語による質問紙調査は、日本語能力によって回答が左右され、調査結果に偏りが生じ、本来の外国国籍MSMの現状が把握できないことも予測される。本研究では、英語圏に加え多言語による質問紙が必要となっていることから、多言語によるインターネット調査システム（日本語、英語、ポルトガル語、スペイン語、タイ語、韓国語、中国語、タガログ語など）による調査が実施できるシステムに従来のシステムを改変し、次年度に試行する。日本では、外国国籍の人々への情報提供が比較的不十分であるといわれており、調査で得られた結果については、コミュニティセンターから発信できる情報に活かしたいと考える。

E. 結論

近年のエイズ発生動向の特徴は、地方のMSMでのHIV/AIDS報告例の増加、若年層MSM

および外国国籍 MSM の報告例（国内感染例が過半数）の増加が示されている。そこで、本年度から以下の 3 点の研究を追加した。

1) 中四国地方における MSM の HIV 検査状況に関する調査

コミュニティセンターの無い地方の MSM への予防啓発、自治体事業連携、MSM 向け HIV 検査に取り組んだ。CBO・HaaT えひめと岡山県の自治体は相互に連携し、MSM の検査促進を図るクリニック検査を企画・実施した。（詳細は別添報告書を参照）

2) 若年層 MSM における性行動および HIV 関連情報活用に関する調査

若年層 MSM において HIV 感染が増加していることから、若年層 MSM に向けた対策を探るために、HIV 関連情報、検査、予防、商業施設の利用等を把握する。本年度は、過去に実施した MSM 対象のアンケート調査から、都市部の 24 歳以下の MSM における商業施設、検査行動、予防行動について総括し、次年度の調査手法を検討した。

3) 外国国籍 MSM の動向と HIV 関連情報活用に関する調査

外国国籍 MSM の HIV 感染者報告が増加している状況を明らかにし、外国国籍 MSM の性行動、受検行動、HIV 関連情報の認知等を把握することを目的に、英語圏、南米、タイ、中国、韓国等の外国国籍 MSM を対象とする多言語によるインターネット調査システムを構築した。

F. 発表論文等

1. 論文

1) Nigel Sherriff¹, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Satoshi Shiono, Michiko Takaku, Ross Boseley and Seiichi Ichikawa: Everywhere in Japan: an international approach to working with commercial gay businesses in HIV prevention.

Health Promotion International, doi:10.1093/heapro/dav096: November 11, 2015

- 2) 高久道子, 市川誠一, 金子典代: 愛知県に在住するスペイン語圏の南米地域出身者におけるスペイン語対応の医療機関に関する情報行動と関連する要因, 日本公衆衛生学会誌, 62(11), 684-693, 2015
- 3) 岡慎一, 市川誠一, 松下修三: HIV 検査と感染予防(座談会), HIV 感染症と AIDS の治療, 6(2), 4-11, 2015.

2. 学会発表 (国内)

- 1) 木南拓也, 岩橋恒太, 荒木順子, 佐久間久弘, 大島岳, 金子典代, 本間隆之, 市川誠一: コミュニティセンターakta を基点とするアウトリーチ活動の効果評価—アウトリーチ実施店舗と未実施店舗の比較—, 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2015, 東京都.
- 2) 本間隆之, 岩橋恒太, 木南拓也, 荒木順子, 佐久間久弘, 大島岳, 金子典代, 市川誠一: コミュニティを基盤とした組織 (CBO) の受け入れとコミュニティ感覚—akta を基点とするアウトリーチの評価—, 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2015, 東京都.
- 3) 塩野徳史, 金子典代, 市川誠一, 伴仲昭彦, 鬼塚哲郎, 町登志雄, 後藤大輔, 宮田りりい. 近畿地域在住の MSM (Men who have sex with men) における初性交時の予防行動に関連した要因—10 年間の変化—. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2015, 東京.